

1. 有機体的自然観と「実体形相」（p78- 82）

➤ 科学革命の終幕

- コペルニクスによる「コスモロジーの転換」/ガリレオによる「自然の数学科」/ニュートンによる「天と地の統一」を経て終幕
 - 背景で近代科学成立を促したもの
 - 古代・中世と、近代以降とを分かつ自然観の根本的転回
 - 自然観の根本的転回誕生と徹底化・体系化の流れ
 - ガリレオによる一次性質と二次性質の区別（誕生）
 - デカルトによる「物心分離」の思想の展開（徹底化・体系化）
 - 「物心分離」；①「物体」と「精神」とを相異なりそれ自体として存在する2種類の物体として区別し、②自然界を生命、靈魂、精神、心などの要素を一切含まない単なる物質的延長とみなすこと
- ↓
- 古代・中世を支配したアリストテレス的自然観＝「有機体的自然観」
 - 宇宙全体を一つの巨大な有機体ないしは生命体になぞらえる
 - 唯物論的自然観である「原子論（by レウキッポス、デモクリトス）」とは相容れない
 - 「原子論」；世界を原子（atomon それ以上分割できないもの）と空虚（kenon）からなるものと考え、自然現象を空虚の中を運動する原子の位置・配列・離合集散などによって説明しようとする考え方
- 17世紀半ば、機械論的自然観と結びつく

➤ 自然を表す言葉

- 英語「ネイチャー（nature）」
 - 語源 ラテン語「ナートウーラ（natura）」
 - 「ナートウーラ（natura）」＝ギリシア語「ピュシス（physis）」の訳語
 - ギリシア語「ピュシス（physis）」
 - 自然界の森羅万象を包括的に表す言葉
 - 「ピュオマイ＝生み出す」という動詞に由来
 - 「生み出されたありのままの姿」、「生長」「生成」の意味を持つ語へ →最終的に事物が持つ「本質」や「性質」を意味するように
 - アリストテレスによる「ピュシス」の第一義的な意味
 - 「自分自身のうちに運動の原因を持つもの」
- 自然とは、自ら生長・生成する靈魂のようなものをうちに含んだ有機的自然、生命的自然に他ならない（＝有機体的自然観）

→人間は有機体として生命的自然の一部であり、その同質性ゆえに、人間は自然を内側から理解することができる

- 「運動」；①実態の生成消滅や量と質の変化はもちろん、食物の発芽や動物の生長などの生命現象までも含む広範な概念 ②「可能態」から「現実態」への移行（e.g. 種子から樹木への生長）

↓

- 近代以降では運動とは単に「物体の空間的位置関係」を意味する

➤ 有機体的自然観を支えた基本前提

- アリストテレスによる「質量形相論（hylomorphism）」
 - あらゆる個物は「質料（hyle）」と「形相（eidos）」とが合成されたものとする考え方（e.g.家屋における漆喰や木材は質料、家の完成図は形相）
 - あらゆる運動は、可能態としての質料が、現実態としての形相を目的として目指すことによって生じる
- 有機体的自然観では、山川草木～動植物に至る一切の存在者が、この目的を目指す運動を、自らのうちに内在する生命的原理に基づいて行う

↓

- 中世のスコラ哲学はこれらを基本的に継承
 - 形相を、事物の本質的性質（自然本性、nature）「実体形相」と、偶然的性質を表すもの「付帯的形相」に分けた
 - 実体形相が質料と結合や分離することで、実体の生成や消滅が生じるとする（e.g.人間の身体＝質料、靈魂＝実体形相）
→実体形相は物体の運動や性質変化の原因という意味で「物体に内在する生命的原理」と言える
- 「物活論（hylozoism）」；人間や動植物以外の無機物的物質にも生命的原理が内在しているという考え

※「アニミズム（animism）」と区別

↓

デカルトが目指したのは、この物活論的自然観を克服すること

つまり、自然から靈魂、精神、心などの生命的要素（実体形相）を排除すること
自然理解のモデルを「有機体」から「機械」へと転換

2. デカルトの「物心二元論」（p82-88）

➤ デカルトの功績

- スコラ学を基盤とした既存の学問体系を打ち倒し、新たな世界観と学問方法論を確立
- 「近代哲学の父」
- 物心分離の思想に基づく、「物心二元論」の提唱

- 「物体と精神」あるいは「物と心」が本質を異にする2つの実体であること、両者の「実在的区別」を論証しようと試みる
 - 方法的懐疑を用いる
 - 少しでも疑わしい不確実な知識を取り除き、消去法によって確実な知識にたどり着こうとする手続き
- 「物心二元論」を考えるプロセス
 - これまで確実と見なされてきた感覚的経験や数学の定理等のあらゆる知識を疑い、否定する
 - 悪霊の存在をも仮定し疑い、徹底化する
 - 「我思う、ゆえに我あり (cogito ergo sum)」というそれ以上疑うことのできない根本命題に到達する
 - 「疑っている私」の存在は認めざるを得ない
 - 存在するために身体や空間的场所は必要としない

↓

「私」は「思惟する(疑う)」という活動のみによって存在を保証される

↓

この「私」のあり方を「精神」として捉え直す
ここで言う「精神」は、その存在が一切の物質的なものに依存しない「思惟実体 (res cogitans)」である
 - 「明晰判明」に知られるものは全て真であると考え
 - 神の存在証明を行う (←神が最も完全な存在者であって欺瞞者ではないということから観念の客観的実在性 (外的世界の存在) を確保しようとする)

↓

外的世界 (自然) の実在性を回復する
 - 物体の本性の解明を行う (蜜蠟の観察)

↓

物体とは一切の生命的なもの、精神的なものを含まない「延長実体 (res extensa)」
であるとして捉え直す
- 「物心二元論」の帰結
 - 「物体」と「精神」はその本性に即して明確に区別され、世界は「物」と「心」という相互に還元不可能な二つの実体から成る
 - ここで出てくる問題；人間の身体と精神 (デカルトは人間だけが持つと考えている) とはどのように結びついているのか？

3. 心身問題と「心の哲学」

- 「心身結合」の事実の説明

- デカルトの「物心二元論」からすれば、精神と身体は互いに独立して存在するもの
- 「心身結合（精神と身体との密接な結びつきを示す現象）」の説明をいかに行うか
 - デカルトの説明；「人間の体内をめぐる動物性気（血液の微細な粒子）が媒体となって、脳の松果腺と呼ばれる部位において精神と身体とが接触し、例えば手足を動かそうとする意思を神経や筋肉に伝達する」
 - ↓
 - ドイツの王女エリザベトの疑問；「人間の精神はいかにして身体の精気が意志的な運動をするように決定し得るのか？」（心身問題）
 - ↓
 - デカルトの弁明；「精神の本性は①思惟すること②身体と合一して働きあうことの二面があり、『省察』の意図は心身の区別を証明することなので①を理解してもらおうと努めた」
 - 精神と身体の実在的区別は哲学的省察の次元のことであるのに対し、心身合一は日常生活において感覚的に知られる事実＝両者は矛盾しない
- 納得のいく解決を与えることはできなかった

➤ 「心身問題」の難しさ

- 近代の科学革命では、「有機体的自然観」から「機械論的自然観」へ、「質的自然観」から「量的自然観」へ大きな変換を成し遂げた
- 「生命的自然」から生命的要素を剥ぎ取り「死物化」するという代償を払った

➤ 現代哲学での捉え直し

- 物質一元論（唯物論）の方向性
- 「心の哲学（philosophy of mind）」
 - 唯物論的傾向
 - 基本的に「心的状態」を「脳の状態」と同一視する立場をとる
- 「機能主義」
 - 心とは脳細胞のみならず、シリコンチップなどの多様な物理的状态によって実現される機能状態である

しかし、心身関係や「志向性」の問題については未だ説得的な説明は与えられていない科学的自然観の元では、延長をもたない「心的状態」や「感覚質」は測定可能な物理量とはみなされず、因果的必然性をもった法的秩序の外に置き去りにされてきた現代において、科学的自然観が一つの岐路に立たされている